

特集

大いなる地球の営み

大気と水は何を語っているか

造園家

矢野智徳

(やの・ともりのり)

# 大地の呼吸をうしろもぢりせー!

四十六億年前、地球は宇宙の大爆発とともに生まれた。

大気と水によって生命は生まれ、絶妙なバランスを保ち続けながら地球の営みを支えてきた。しかしいつからか人間は生態系から外れ、人間中心に生きるようになってしまった。

効率、便利、人間を中心とした安全ばかりを追求し、大地とともに生きる生き物たちの存在を見ないようになったのだ。

「人間の開発によって大地が呼吸不良となっている」

大地の現状を見つめ、本来の姿にとりもどそうとしているのが、造園家・矢野智徳氏である。

「この仕事の最終目的は、人間のためではなかった」

と言う矢野氏が取り組む大地の呼吸再生事業は、これまでの勝手な人間の行いに対する生き物たちへの「つぐない」である。

矢野氏の目に、ここまで生態系から乖離してしまっただ現代人の姿はどう映っているのだろうか。

「実物」の自然は  
逞しく生き抜いていた

大地は呼吸しています。人間と同じように空気を吸い、その空気が大地の中に枝分かれをして行き渡っていくことで、木の根や土の中の生き物たちが生きています。しかしいつからか、大地の呼吸を人間が阻害するようになってしまいました

た。それは私が長年植物に関わってきた。気付かされたことです。そして、植物に対する見方をはじめ、人間に対する考え方も随分と変わっていったように思います。

実家が植物園だったということもあり、小さい頃から兄弟とともに植物園の草花の世話をするのが日課でした。学校に行く前には園内の手入れをし、帰って来てもからもやるべきことが山積みの毎日です。

当然友だちと遊ぶ時間なんてないので、不満に思うこともありました。

それが中学生くらいになると、植物園に来ているお客さんの表情から、植物が人の心に少なからず影響を与えているということを感じるようになっていきました。花が咲いたり、紅葉する姿を見ては、自分自身でも嬉しくなりました。そんな魔法のように人の心を動かせる自然の力に、いつしか尊敬の念を抱くようにな



つていったように思います。将来の進路についても、おのずと自然に関わることをやりたいという意識が芽生えていきました。

大学では浅く広く自然の基本を学びたいと思い、「自然地理学」を専攻しました。希望を胸に大学に入ったわけですが、授業が始まると眠たくなる。やる気はあるのにどうしてなのだろうと悩んだ結果、「実物」を見ていないからピンと来ないのだ！ という答えに行き着きました。先生に相談し、「勉強してから行くのが普通だけれど、自分の場合はどうも駄目だから、先に見て来ます」と休学届けを出し、日本全国放浪の旅に出ることにしました。先生も「矢野につける薬はない」とあきれていました(笑)。

一年ちよつとの間、北海道から沖縄まで日本全国をひたすら歩いて回りました。これまでに見てきた植物の姿とは違い、地域ごとに持つ美しい風土を体を通して感じる毎日でした。

その反面で、真つ暗な夜の山道で迷ったり、冬山で遭難しそうになったりと、命の危険を感じることもしょっちゅうです。「明日は生きていられるだろうか」という思いが常に頭から離れませんでした。そんな私を尻目に、寒かろうが、暑

かろうが、どんな険しい気候状況の中でも植物や小さな虫、鳥などの動物たちは逞しく生き抜いていました。「図体がでかいだけで何が万物の霊長だ」と人間の脆さを痛感させられました。

そうやって日本全国を歩いてみて分かったのは、世界の中で見ると日本は小さな国ですが、寒い地域から亜熱帯地域までそれぞれに特異性を持っていて、生き物の多様性も空間として凝縮された類い稀な国土であるということ。その意味で、日本列島の広さを実感させられました。しかし、訪れるどの場所においても、風土に合わせた環境保全や地域産業がなされているように思えませんでした。

思わず役場やその土地に住む人々に「工夫をして地域の特異性を生かすことはできませんか」と話してみるのですが、「君は若いからそんな理想論が言えるんだ。社会はそんなに甘くないよ」というような否定的な言葉を聞かされるばかりでした。

そんな経験を重ねていくうちに、いつしか「もしこの旅で無事に東京に帰れたら、社会ときちんと向き合うために自分で仕事を始めよう」という思いが芽生えていきました。

なんとか帰京を果たした後、ある起業

セミナーに参加しました。そのとき聞いた「なんでもいいから明日でできることから始めなさい」という言葉に背中を押され、「自然と関わる仕事であれば自分にもできる」と思い、始めたのが造園業の仕事でした。

### 空気と水の循環が 大地を生き返らせる

造園業で生の現場を見ていくうちに、少しずつ大地が呼吸しているという事実が気付いていきました。都内で住宅庭園の造園やメンテナンスに取り組んでいた頃、「なぜ植物が枯れるのか」、「なぜ自然の木は伸びないのに、庭に植えられた木は毎年剪定してもすぐに伸びるのか」、そんな疑問を漠然と持つようになり、あるとき森に生えている木と庭の木では、繁茂の仕方などが全く異なっているということに気付いたので。ある草花を東京の異なった場所に植えてみると、元気になるものもあればすぐに枯れるものも出てくる。どちらも同じような環境なのに、植えてみると成長にムラがあるので。肥料の問題でも、日当たりなど自然条件の問題でもない。どうしてなのか。造園屋さん以外にも建築、土木、左官など



現場で携わる別の業種の人たちに聞いても誰も分からないのです。

その疑問を解決するヒントとなったのは、これまでに見てきた植物の姿でした。特に日本全国を歩き回った日々の景色は体全身に染み付いているようで、水、空気、土の状態をはっきりと覚えていきます。植物園ですつと見てきたような一カ所に定着している植物の姿、あるいは一年間

歩いて見てきた本来の自然の中で生きていく植物の姿を頭の中で比較するのです。

「あの場所でのように咲いていたのだろうか」「風の様子、雨の様子、草の様子はどうか」「繋がりを想像しながら問題のあるところをひたすら観察するようにしました。

そこで注目したのが水の動きです。植物の成長に差があるのは水の動きに違い

があるからではないかと思ひ、水はけの状態を調べました。すると、水はけを調整しているのは土の中の空気だと気付いたので。空気の通り具合を改善することでみるみるうちに土の状態は良くなっていきました。

土が良い状態になったかどうかは、植物の表情を見れば分かります。空気の循環が低下したときの枝葉の様子と循環が始まっていくときとの違いは一目瞭然で、早いときには分単位でその変化は表れます。穴を掘った途端に葉っぱがしっかりと立ち上がってくる。そういった現象が、多くの場所で起こってきたのです。

「植物も人間と一緒に呼吸をして生きている」と思うようになりました。人間が空気を吸って生きているのと同じように、大地もまた空気と水の循環をいのちの糧として生きているというわけです。

その現実を大学の先生たちに話す就先生たちも驚きの表情を浮かべました。水や土に注目している専門家はいるものの、空気の動きについてはほとんど聞いたことがないと言われました。写真を見せた話をしていくうちに「これは大変なことだ」ということで、空気と水の動きがもたらす植物の変化をもっと追ってこ





沖縄県国頭村(ヤンバル地域)で環境改善が行われる前の写真。下草は呼吸不良を起こしている(2003年10月撮影)



改善後の写真(2005年9月撮影)

中山間地、奥山の人が踏み込んでいないような土地までも、同じような大地の呼吸不良が起きていることが見えてきました。共通しているのは、人間によって開発が進められている周辺地であるということです。

一九七〇年代に田中角栄元総理によって唱えられた「日本列島改造論」以来、日本全国でダム工事や林道、農道、一般道などの開発が行われ、日本全国津々浦々までコンクリート化された道路網が張り巡らされ、地中の水脈が断ち切られるような環境がつくられてきました。土

の中を流れている空気と水の循環がなくなり、大地が呼吸不良になる。その結果、山から泥水が出たり、土砂災害などさまざまな問題が生じています。大地の中の生き物たちも呼吸低下を起し、木が枯れるなど生態系に多大な異変が起きているのです。

### 人間中心の「安全」思想がもたらした大地の動脈硬化

最初は造園という小さな世界で気付かされたことですが、都市部だけではなく

河川からは清流が消え、名水地としても有名な南アルプスや八ヶ岳、富士山系などでもいまやその沢筋に入って水を飲むとすれば泥水が出るような状況です。森では枝が枯れ、葉っぱが落ち、山は禿

げ山と化しています。

しかし、その現状に対して言われるのが「間伐をしていないからだ」とか「森や山の管理ができていないからだ」という専門家の声。もちろんそういった原因もあるけれども、いちばん根底にあるのは、本来円滑に動いていた空気と水の循環、大地の中の水脈がうまく機能していないことだと考えられます。

平成二十三年に起きた台風十二号は、紀伊半島に甚大な被害をもたらし、和歌山県の岩盤の支持層崩壊や土砂ダム崩壊が多発しました。また、昨年十二月には山梨県大月市と同県甲州市の間にある笹子トンネルの崩壊、今年四月には浜松市の茶畑で地滑りなどの被害がありました。そういった事故も内部環境だけではなく、実はその外部環境である水脈や大地の状態にも問題が内在していると私は思っています。人間の開発事業によって途中途

中の水脈を寸断してきた結果が、三、四十年経ったいま、動脈硬化のように泥詰まりを起こして生態系全体に影響を及ぼしているのです。「3・11」後の復興事業で、河口のコンクリート堤防のエリアをこれまでよりさらに広げると言っていますが、それは流域全体に大きな影響を及ぼしかねません。

めた環境改善ができないかとやっっているところ。理想論だと言われた環境保全と地域産業の両立の問題がささやかながら現実として見え始めた気がしています。

### 人間のためではない生態系全体につぐないをするために

日本人にとって川は大事な交通網であり、流通の要でした。漁をする海の人たちと山の人たちとを繋ぐ水脈は、生活にとって大切なものという意識が誰にもありません。日常的に、そして年間を通して必ず何かしらの問題が起きてくるので、災害のためにも水脈保全は人の社会において重要なものだったわけです。だから

こそ地域はまともだったし、衣食住のすべてが流域からもたらされた恵みだという意識を持って保全に取り組んできたわけです。

「流域生態系」と言いますが、河口から上流域まですべての生き物たちが連携して、日夜流域を保全しています。何も考えていないように見えるけれど、生き物たちが分相応な生活をしているだけで流域の水脈がちゃんと保全されている。逆の見方をすればその流域の空気と水の循環が生き物たちを生み出している。そう考えると、それぞれの生き物たちが生まれてくるのにはちゃんと意味があって、無駄なものはないということが分かります。必ず必要性があって生まれてきていて、その連鎖が全体の流れをつくっている。私にはそう見えて仕方がありません。

しかし、コンクリートで大地を塗り固めるようになってから人間は保全をやらなくなりました。砂防ダムを造り、護岸をすれば地形は保たれて災害からも守られる。人間の安全ばかりを追求し、自然の摂理を無視するようになってしまったのです。コンクリートで地面を覆ってしまったことによって生き物の存在も水脈の大切さも見えなくなってしまうので





はないでしょうか。  
 生き物にとって大事な生活の糧をこれほど独占的に使い、明らかに阻害する状態で消耗し続けています。空気と水の循環の中で生きる生き物たちは直接的な影響を受け、森から腐葉土が消え、下草が消え、バクテリアが消え、小動物が消え、森の動物たちの食べ物がなくなり、その結果動物たちの被害被害が広がっていると感ずるのです。  
 先日、三十年ぶりに神奈川県北西部に広がる丹沢に登りました。森の原木は消え、下草も消えて、土砂崩壊は谷筋まで進んでいたのです。かつて見たものはまったく異なった光景でした。  
 夜になると、後から鹿が付いてきました。草がないので食べ物を探しているのです。また、その日はちょうど近くの湖で花火大会をやっていて、たった一発の花火がこだまとなって闇の山に響き渡り、とんでもない爆音となってかえってきていました。私は普段、動物たち(犬や猫)とともに生活していますが、花火が嫌いで音を聞く度に逃げ回りながら耳をふさぐような仕事をします。ですからきつとこの場所に生きている生き物たちにとってもその音は脅威なのだと思えます。こんなことですら自然の世界には害になっ

ているんだと愕然としました。日頃、知らず知らずのうちに人間中心の生活にひたっている私たちの在り様を垣間見せられた気がしました。

そのときに思ったんです。私は、これまで人と自然を繋ぐ仕事をしてきたつもりでした。しかしいつのまにか、都会の緑化や環境保全など、どこかお客さんのためであったり、その地域に住む人々の生活ニーズに答えられるようにと、人間側に重くウエイトをおいてきたように思います。本当にやりたかったことはそうじゃない。大学以来ずっとやってきたこの仕事の最終目的は人間のためだけではなく、人間のやってきた行いをもう一度よく見直し、人と生態系全体を繋いでいけるような活動だったと思ひ知らされたのです。

### いのちを再生させる 縄文人の智慧

「杜の園芸」では、造園業とは別に、環境保全に対する勉強会を開いています。地域から要請があつて開催することもあれば、身近な人を集めて、大地の再生の仕組みなど実践をしながら学んでいます。最近、新たな試みとして行ったのが、



「竪穴式住居づくり」。これは「3・11」のあと、生活環境をもう一度見直してみようと思つて始めたものでした。  
 被災地では大地震と津波の影響で建物だけではなく、生活環境そのものが破壊されました。まさに「ゼロ」の状態になったときに、どこから暮らしを組み立て直せばいいのか。エネルギーの問題から日常生活の有り様、衣食住の問題すべてを含めてもう一度見直してみようという意図があつたのです。  
 もともとは環境講座の一環として始ま



つたものなので、人の日常空間から一歩奥へ入った奥山の環境と里山の環境の両方でいま起きていること、問題の対処、改善の仕方、手法を含めてみんなで学ぼうと考えていました。その中でも自然と最も直接的に関わり、最も素朴に暮らししていた縄文という時代に注目しました。みんな縄文の遺跡を回ってみたい、専門家に話を聞いては現代と縄文時代の共通点や異なる点を考えてみたい、『縄文』という映画を監督された大重潤一郎監督



矢野 智徳 やの・とのり  
造園家・環境再生士。1956年（昭和31）福岡県北九州市生まれ、花木植物園で育つ。東京都立大学において理学部地理学科・自然地理を専攻する。全国を放浪して各地の自然環境を見聞し、84年、矢野園芸を始める。95年の阪神淡路大震災によって被害を受けた庭園の樹勢回復作業を行う中で、大量の瓦礫がゴミにされるのを見て、環境改善施工の新たな手法に取り組む。99年、元日本地理学会会長の中村和郎教授をはじめ理解者とともに、環境NPO社の会を設立。現代土木建築工法の裏に潜む環境問題にメスを入れ、その改善予防を提案。在住する山梨県を中心に、足元の住環境から傷みゆく奥山の自然環境の改善までを、実践作業を通して学ぶ「大地の再生」講座を開講中。



をお招きしてディスカッションを行ったりもしました。その流れで、まずは縄文時代の暮らしの基盤であった竪穴式住居を造ってみようということになったのです。

こういった場所に造られ、どのような建て方をして、そこでどんな生活をしていたのか。構造の原型モデル図を元に、みんなでああでもないこうでもないと思像をめぐらせながら造っていくわけですが、毎回毎回目から鱗の発見ばかり。当初一週間で終えるはずの家造りの講座は、一年掛かりになりました。まるで生き物のように呼吸をしているような縄文小屋が完成したのでした。

人間が住むための空間をつくりながらも地面の大地の問題から地上の生き物たちの環境づくりも含めてその構造は考え抜かれていました。風通しがよく、そこで生きている自然の植物や生き物たちを傷めない。逆に生き物たちに手伝わってもらいながらその空気や水の循環を保つように出来ています。湿気はこもらないし、ほこりも出ない。空気がうまく循環しているの、いろいろで火を起こしたときにも小屋の中に熱が無理なく行き渡り、煙は上から抜けていくという快適な空間がそこに広がっていたのです。

家を組み立てる資材についても量や質など過不足なく、吟味されていたようです。数十本の茅や葦を使ってお造られた屋根は薄く、ところどころに隙間が見えていました。雨が降ったら雨漏りは免れないだろうと覚悟していましたが、雨の日には小屋の中で過ごしていても不思議と雨は漏れてきません。茅や葦に伝って流れ、中に雨水が入ってこないのです。

小屋の中に響く雨音は次第にさらさらという音へと変わっていききました。雨が雪に変わって屋根から滑り落ちていくのです。翌日の朝まで雪は降り続き、外は一面真っ白の状態でしたが、それでも屋根から水が漏れてくることはありませんでした。ある高さまで雪が積もると重さで滑り落ちるような構造になっているために、雪降ろしの必要のない屋根だということにも気付かされました。

もうひとつ驚いたのが、屋根から落ちた雪の姿。屋根を伝って落ちた雪は、小屋の周りにドームを造っていたんです。ドームの中にすっぽりとおさまった小屋は二重構造となって小屋の中の保温性が倍加します。まるで雪が小屋を守ってくれているかのように私には見えました。

また、小屋の中で過ごして初めて気付いたこともありました。昔の人は、火を

消さない生活をしてきたそうです。寝るときには火に灰をかけ、朝になると灰を除けてやれば、火はまた燃えはじめ。火も人間と一緒に灰の中で寝ているというわけです。火を「起こす」という言葉にはそういう語源があるのでしょうか。

それは、地面からちゃんと空気が動いてゆるやかに呼吸できる状態を保つてやるということでもあります。火を絶やさないと、いのちを繋ぐ作業だったのかもしれない。火もひとつの「いのち」として昔の人は向き合っていたのだと思います。

一見死んでしまったようにも見える建物の素材一つひとつが、小屋が出来たことによって、いのちを吹き返したかのようでした。いろいろに火が起こされ、木が空気を通して生命活動をするように見えたのです。人間と他の生き物たちの決定的な違いは、この火との付き合い方なのではないかと思えます。いのちがなくなってもうまく循環を繋ぎ、またいのちを再生させる。そういう目線で自然のエネルギーや生き物たちと付き合っていたというわけです。

ですから、この一年間の縄文小屋造りは震災後の日常生活や環境、エネルギー問題などを考えるうえで決定的な学習と

なりました。いのちを粗末にしない、エネルギーを粗末にしない。本当に住環境としてはいまの建築では到底かなわない、自然の合理性を生かした最先端技術でした。

それは縄文時代の人たちが意識をしていなくとも、大地の呼吸を活かし、空気と水という生き物のいちばん原点である生活の糧をちゃんと見落とさずに付き合ってきたという証明でもあります。空気と水の循環をちゃんと見、意識し、考えていた当時の姿勢に触れ、私たちが縄文の時代に立ち返って学ぶことは貴重なことだと思ひ知らされました。

### 杜の民として 人間と自然との間を繋ぐ

「杜」という漢字があります。社名にも使っている漢字ですが、「森」ではなくあえてこの字を使ったのには理由があります。

人間が森の神様に誓って「ここを傷めず大事に使いますから使わせてください」と森の一部を線で囲った場を「杜」と言うそうです。これは古代の日本人が考えた言葉で、そのつくりを見てみると「土」木」の二字で構成されているのが

分かります。

いまで言う「土木」とは、土も木も排除され、人間にとって都合のいい人工資材で固めていく技術が主流となりました。しかし、この本来の土木とは、木と土がベースとなった日本の陸地を「傷めず大事に使う」というものでした。「傷めず」とは具体的に考えると空気と水の流れを傷めないということです。

また、日本の造園技術というのは、そもそも日本庭園や坪庭、盆栽という小さな世界に凝縮して大自然のメカニズムをつくりあげるといえるのです。地下の根の呼吸も含めた空気や水の動き、見える所も見えない所も含めて考え抜かれていたもの、それが日本造園の神髄です。

庭という小さな現場から皮肉にも生態系における問題点が次々とにじみ出てきました。そして現場のメカニズムは地球全体の自然界のメカニズムだということにも気付かせられました。

つまり、大地は呼吸をしていて、地球も呼吸をしている。その営みの中で人間も生かされているのです。現場を通して気付かされたこの認識を持ち続けながら、自分の足下から見えて来た問題にこれからは「杜の民」の目線を通してしっかりと向き合っていくつもりです。